

## INTERVIEW

鹿児島県伊集院保健所長  
宇田英典先生



# 地域医療と社会医学の 連携を目指して

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

## 公衆衛生の道を選択して

山田隆司(聞き手) 今日、鹿児島県伊集院保健所に宇田英典先生をお訪ねしました。

先生は昨年10月に開催された第76回 日本公衆衛生学会総会の実行委員会副委員長も務められましたので、そのお話も伺えればと思います。

宇田英典 日本公衆衛生学会ができて70年になったのですが、節目となる70年目に鹿児島で開催されたということで、とても感慨深いです。今回の学会のテーマは「明治維新と薩摩と公衆衛生－公衆衛生の黎明期を支えた地から未来への発信－」としました。学会のポスター(写真)に写っている、ウィリアム・ウィリスというのは幕末・維新に駐日英国公使館の医官として来日し、幕末の事件で数多くの人命を救い、戊辰戦争では敵味方の区別なく治療をしたイギリス人医師で

す。東京大学医学部の前身である東京医学校兼大病院の創始者でもあります。ところが明治政府になりわが国の医学の主流がドイツ医学に変わったので、東大もドイツ医学になったわけですね。それでその後、彼は鹿児島大学医学部の前身である赤倉病院の病院長になり、医者の教育や研修をしたり、治療を行いました。そのかわらで下水道を造ったり、乳児健診をしたり、あるいは栄養改善の指導をしたりしたので、ウィリアム・ウィリスはある意味で、公衆衛生の黎明期のさまざまな活動を行った人物でもあるわけです。そのウィリアム・ウィリスの弟子に藩医で疫学の祖と言われている高木兼寛がいます。高木兼寛は東京慈恵会医科大学の創始者です。そしてポスターの一番右にいるのが島津



第76回 日本公衆衛生学会総会ポスター

齊彬ですが、こういう人材を輩出している島津の先見の明、国際感覚、あるいは人づくり、地域づくりが背景にあったということで、明治維新150年にも合わせて、「公衆衛生の黎明期を支えた地から未来への発信」というテーマにしました。

**山田** 薩摩とともに公衆衛生の歴史があったわけですね。

では、先生の経歴を簡単に紹介していただけますか。

**宇田** 私は昭和53年に自治医科大学を卒業した1期生です。山田先生ともテニス部などでいろいろとお付き合いがありましたね(笑)。

卒業して、鹿児島大学で2年間の臨床研修、県立北薩病院で1年間の研修後、下甕島の一番北にある鹿島村診療所に2年間勤務しました。人口千人くらいのところでした。その後国立南九州中央病院(現鹿児島医療センター)で1年間研修、そしてまた県立北薩病院で実務を1年経験後、奄美大島の瀬戸内町古仁屋にある瀬戸内町へき地診療所に2年間勤務。そこでは診療所の診療業務のほかに加計呂麻島や池島、与論島の巡回診療を行っていましたが、その2年で義

務が終了しました。

**山田** 研修は概ね内科系だったのですか。

**宇田** 外科系です。どうしてかという、当時は卒業生が出身県に戻っても引き受けてくれるところがあるかどうか分からないという状況だったのですね。ところが鹿児島県内で医療を行うとなると、地元の大学の医局に所属しないと、ある意味医師としての活動ができないという時代だったのです。そこで県が鹿児島大学医学部に相談したところ引き受けてくれたのが第二外科しかなかったわけです。

**山田** 卒業生は全員第二外科に入ったのですか。

**宇田** そう、選択肢はなかったので3人とも同じ第二外科に入って、北薩病院の外科で研修しました。ただ県立病院というのは第一外科の関連病院だったのですね。なんとか人間関係を構築しながら、手術の機会をもらってやっていたといった感じでした。

それで瀬戸内町へき地診療所で義務が終わるころに義務明け後はどうしようかと、いろいろ考えたり、相談したりしたのですが、当時の県の衛生部長の郡司篤見さんがとてもいい人で、「一人ひとりを救うのも大事だけど、多くの人のことを考えて予防するとか仕組みをつくら」といった、公衆衛生という分野もある。しかもそれは人が少ない。これから続く後輩のためにも県の行政の中で、そういったことをやるという選択肢もあるのではないかと」ということを言われたのですね。いろいろ考えてそちらに進むことにしました。

**山田** ほかの2人はどうされたのですか。

**宇田** 義務年限が終わって、1人は県外へ出てもう1人は開業しました。

**山田** 義務年限が終わった後、自治医大の卒業生のポストがあったわけではないのですね。

**宇田** 私は1期生でしたので、われわれには経験がなく、県立病院も経験がなく、県だって医者